

第 191 回 岐阜歯科学会例会

191th Annual Meeting
of
the Gifu Dental Society

プログラム・抄録集



2019年7月13日(土)

担当：朝日大学歯学部
口腔機能修復学講座
歯科補綴学分野
部分性義歯学

2019年度岐阜歯科学会総会および 第191回岐阜歯科学会例会プログラム

- 1) 開催日 2019年7月13日(土)
2) 会場 朝日大学1号館3階 第4大講義室
3) 時間 総会 13:00～ 例会 13:30～ (総会終了次第)

特別講演 13:30～ (講演25分、質疑応答5分)

座長： 近藤 信夫 教授

私の自然免疫研究

朝日大学歯学部 口腔感染医療学講座 口腔微生物学分野 教授
引頭 毅

一般口演 14:00～ (口演10分、質疑応答2分)

座長： 河野 哲 教授

朝日大学医科歯科医療センターにおける

歯科麻酔科管理症例の臨床統計 (2017～2018年度)

○林 真太郎 後藤 隆志 中西 康典 栃木 美保
岸本 敏幸 櫻井 学

(朝日大学歯学部 口腔病態医療学講座 歯科麻酔学分野)

(担当分野：朝日大学歯学部 口腔機能修復学講座 歯科補綴学分野 部分床義歯学)

私の自然免疫研究



朝日大学歯学部 口腔感染医療学講座
口腔微生物学分野 教授
引 頭 毅

経歴

| | |
|----------|---|
| 1992年3月 | 北海道立札幌南高等学校卒業 |
| 1999年3月 | 新潟大学歯学部卒業 |
| 2003年3月 | 北海道大学大学院歯学研究科（歯学基礎系専攻）修了 |
| 2003年～ | 北海道大学歯学研究科・助手 |
| 2005年～ | 国立長寿医療研究センター研究所 口腔疾患研究部・研究室員 |
| 2006年～ | 同上 口腔感染制御研究室・室長 |
| 2008年～ | 日本学術振興会・海外特別研究員 米国 Scripps 研究所 Department of Immunology, Research Associate |
| 2008年～ | 朝日大学歯学部口腔感染医療学講座 口腔微生物学分野・助教 |
| 2010年～ | 同上・講師 |
| 2016年～ | 同上・准教授 |
| 2019年2月～ | 同上・教授 |

[専門] 免疫学, 分子生物学, 微生物学

[研究分野] (主な研究対象) 自然免疫, 細胞内シグナル伝達, オートファジー, 歯周病関連細菌

受賞歴

- 2003年 歯科基礎医学会 学会奨励賞受賞
- 2006年 歯科基礎医学会 優秀ポスター発表賞受賞

所属学会

- 岐阜歯科学会 (役員)
- 歯科基礎医学会 (代議員)
- 日本細菌学会
- 日本免疫学会
- American Association of Immunologists (AAI)
- American Society for Biochemistry and Molecular Biology (ASBMB)
- International Association for Dental Research (IADR)

自然免疫, といってもピンと来ない先生方も多いかもしれません。免疫系は自然免疫と獲得免疫から成り立っていますが, そもそも多くの歯学系研究者にとって免疫学自体が言わば鬼門のような存在なのかもしれません。確かに免疫学というのは覚えるだけでは理解できませんし, かと言って免疫学の分厚い教科書を紐解いて一から理解しようと試みるのはかなり高いハードルです。新しい知見も次々と増えていきますから, 折角芽生えた免疫学の学習意欲も萎えていく, そういうものではないでしょうか。実を言うと私は大学院3年まで正に「免疫学回避症」でした。大学院2年の終わりまでは, (知る人ぞ知る)細胞壁の存在しない特殊な細菌であるマイコプラズマをヒト口腔からひたすら分離培養する, というようなことをやっており, 免疫の「め」の字も無い生活を送っておりました。そんな私を免疫学の世界へ誘い, そして免疫研究の面白さに目覚めさせてくれたのは, 本日お話をさせていただく「自然免疫」に関連する研究の数々, そして恩師の柴田健一郎先生の存在でした。

私が自然免疫の研究を始めた2001年当時は, 自然免疫研究が黎明期から発展期へと移行しているような時期でした。自然免疫研究の黎明期に相当するのは Toll 様受容体(TLR)の発見, そして免疫系における TLR の機能と役割に関する様々な発見が次々と報告されていた時期です。ハエで見つかった「Toll」と名づけられた受容体はカビの発生を抑える自然免疫を担っており, そしてヒトでそのホモログ(相同体)が十個も存在する…後にノーベル生理学医学賞の対象にもなったこれらの発見は多くの研究者に大きなインパクトを与えました。そして, 何より TLR は微生物の成分と「直接」結合することで, 微生物の存在をある程度特異的に感知するセンサー, 言わば「微生物受容体」として働くことが分かってきたのです。これは当時, 自然免疫には「全く特異性が無い」と考えられていた常識を完全に覆すことになる大発見でした。

私が自然免疫研究を始めた頃には, TLR4 がグラム陰性菌のリポポリサッカライド(LPS)の受容体として確定しており, そして TLR2 は細菌特有のリポプロテインの受容体である(らしい), というところまで報告が出ている状況でした。当初, 私はマイコプラズマを研究していたこともあり, マイコプラズマのリポプロテインは TLR2 で認識されるのか, という柴田先生の研究テーマをお手伝いさせて頂いておりました。私達が研究していたマイコプラズマのリポプロテインは, 一般的な細菌のリポプロテインとは異なる特有の構造をもっています。実はこの特有の構造は TLR2 による認識を受けのですが, そこには誰も予想していなかった TLR6 も関与していることがその後分かってきたのです。つまり, 我々の体にはマイコプラズマを感知するための受容体が存在するのです。この一連の研究をやりながら感じた得も言われぬ「研究の面白さ」というのは今でも忘れられません。結局, 私たちの研究報告は出遅れて二番煎じとはなりましたが, 免疫初心者の私を自然免疫の世界へと誘うには十分すぎる研究内容でありました。

その後私には研究者としての存在意義を問われるような人生の岐路がいくつも待ち受けており, 紆余曲折を繰り返してきましたが, 何とかその間少しずつ成長しながら, あくまで細々とですが, 自然免疫研究を絶やすことなく続けることができました。ここまで前置きが長くなりすぎましたが, 今回の講演では, 私が朝日大学に来させていただいてから丸10年経つという節目であることもあり, 勝手ながらこれまで本学で行ってきた『私の自然免疫研究』を振り返りながらその一部をご紹介させて頂ければと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

朝日大学医科歯科医療センターにおける歯科麻酔科管理症例の臨床統計(2018年度)

○林真太郎 後藤隆志 栃木美保 中西康典 岸本敏幸 櫻井 学
朝日大学歯学部口腔病態医療学講座歯科麻酔学分野

【緒言】

2018年4月から朝日大学医科歯科医療センターは入院施設の閉鎖に伴い、全身麻酔法は日帰りで行うことになった。そこで、歯科麻酔科での診療体制が入院施設閉鎖前と比べてどのように変化したのかを検討して、より安全で質の高い医療を提供するための資料とすることを目的として本研究を行った。

【方法】

本研究は朝日大学倫理審査委員会の承認を得た(承認番号30033)。2018年度に当センターの歯科麻酔科で管理を行った全身麻酔法、静脈内鎮静法症例を対象として、診療録および麻酔記録をもとにレトロスペクティブに調査を行った。患者の人口統計学的情報に加えて、日帰り全身麻酔法では担当科、通院時間、麻酔法、処置内容、処置時間、麻酔時間、使用薬物、術中・術後合併症、全身麻酔終了帰室から帰宅までの時間、帰宅後の合併症について調査を行った。静脈内鎮静法では担当科、鎮静法適応理由、鎮静時間、使用薬物、術中合併症についての調査を行った。

【結果】

2018年度の日帰り全身麻酔法総症例数は49例であった。担当科別では小児歯科18例、口腔外科18例、障がい者歯科14例、保存科1例であった。患者の年齢は30歳未満の患者が80%を占めた。処置内容は抜歯術53%(智歯抜歯17例、正中埋伏過剰歯6例、その他の抜歯4例)、集中歯科治療35%、その他12%であった。処置時間は 100 ± 48 分、麻酔時間は 149 ± 48 分であった。全身麻酔に使用された薬物は麻薬性鎮痛薬であるレミフェンタニルが全例、セボフルランが70%、プロポフォールが26%、デスフルランが4%であった。術中合併症は気管支挿管による換気不全が1例認められた。術後は、バイタルの安定化、飲水、排尿、術後悪心・嘔吐や術後疼痛の有無などの確認を行って帰宅の判定とした。術直後合併症は認められず、帰室から帰宅許可までの時間は 120 ± 30 分であった。通院時間は 24 ± 10 分であった。帰宅2~5時間後に行っている電話診察では合併症は認められなかったが、電話診察後4名の患者から歯科麻酔科の担当医に緊急連絡があった。緊急連絡の内訳は、熱発2例、術後出血1例、術後疼痛1例であった。翌日診察では重篤な合併症は認められなかった。

静脈内鎮静法の総症例数は191例であった。担当科別では保存科74例、障がい者歯科51例、口腔外科44例、補綴科19例、インプラント科7例、歯周病科4例、小児歯科1例であった。適応理由は歯科恐怖症が51%で最多であった。鎮静時間は 76 ± 27 分で、全例においてプロポフォールが使用されており、そのうち83%の症例でミダゾラムを併用していた。術中合併症はSpO₂の低下が最多で61%の患者に認められた。処置終了から帰宅までの時間は 32 ± 17 分であった。

【考察・結論】

全身麻酔症例は2017年度(197例)と比べて大幅に減少していた。これは手術室を除いた麻酔室での全身麻酔症例数を比較すると、2018年度は2017年度(49例)と症例数に差はなかったことから、減少は入院施設閉鎖に伴い口腔外科症例が朝日大学病院で行われてる影響と考えられる。患者年齢は低年齢化が認められた。この原因は明確ではないが、入院の必要性がなくなったことにより、小児、障がい患者にとって全身麻酔法が選択肢の1つとして加わった可能性がある。全身麻酔に使用した薬物は患者の帰宅を考慮して、作用時間が短く覚醒の速やかなプロポフォール、レミフェンタニルが多くの症例で使用されていたが、小児の症例ではセボフルランがほぼ全例で選択されていた。処置時間は当センターの基準である120分を大半の症例が下回っていた。重篤な術中合併症がみられなかったのは、適切に日帰り全身麻酔法の適応症例が選択されている結果だと思われる。全身麻酔が直接関係する合併症ではないが、患者帰宅後に術後出血と術後疼痛で2症例が深夜に再来院したため、術前診察では全身スクリーニングだけでなく、処置内容についても担当医と相談した上で日帰り全身麻酔法の適応を判断する必要があると考えられた。通院に関しては、当センター外での急変に直ちに対応できるように概ね片道1時間以内という基準を定め、全ての症例において守られていた。通院に1時間以上を要する症例については当センター近隣のホテルに宿泊を依頼した。

静脈内鎮静法は年々増加傾向であり、特に保存科および障がい者歯科で症例数の増加が認められた。

日帰り全身麻酔法および静脈内鎮静法は患者の満足度が高く、様々な患者のニーズに応えることが可能な方法である。今後もすべての患者に安全かつ快適な歯科治療を提供するために、当センターでの歯科麻酔科のシステムを構築したいと考える。

岐阜歯科学会開催予定

第192回例会

2020年2月22日(土) 予定

担当分野：歯科補綴学分野/全部性義歯学

2020年度第1回総会および第193回例会

2020年6月末頃予定

担当分野：インプラント学分野

2020年度第2回総会および第194回例会

2021年2月末頃予定

担当分野：障害者歯科学分野

2019・2020年度 岐阜歯科学会役員一覧

2019年4月1日現在

<理事>

| | | | |
|-------------------------|-------|------|------|
| 飯沼光生 | 石神元 | 江尻貞一 | 大橋宏重 |
| 柏俣正典 | 勝又明敏 | 亀水秀男 | 河野哲 |
| 北井則行 | 玄景華 | 近藤信夫 | 櫻井学 |
| 裕哲崇 | 住友伸一郎 | 滝川俊也 | 玉置幸道 |
| 友藤孝明 | 二階堂徹 | 永山元彦 | 中本哲自 |
| 林時晴 <small>(県歯)</small> | 藤原周 | 都尾元宣 | 村上幸孝 |
| 村松泰徳 | 若松宣一 | | |

(50音順)

<執行部>

| | | | |
|------------|-------|----|-------|
| 会長 | 永山元彦 | | |
| 副会長 | 近藤信夫 | | |
| 副会長 | 住友伸一郎 | | |
| 常任理事(庶務部) | 引頭毅 | 幹事 | 猪俣恵 |
| 常任理事(事業部) | 河野哲 | 幹事 | 田中雅士 |
| 常任理事(編集部) | 友藤孝明 | 幹事 | 東哲司 |
| 常任理事(経理部) | 裕哲崇 | 幹事 | 安尾敏明 |
| 常任理事(県歯連携) | 藤原周 | 幹事 | 小嶋千栄子 |
| 監事 | 佐藤慶太郎 | | |
| 監事 | 井川清之 | | |

<顧問>

- 宮田淳(学校法人朝日大学理事長)
阿部義和(岐阜県歯科医師会会長)